

2025年9月1日

第 350 回 日本内科学会 九州地方会を終えて

琉球大学医学部医学科 5 年 稲嶺賢太郎

はじめに、この度の発表の機会をいただき、ご指導くださいました益崎裕章教授、中島知先生をはじめ、内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科)の先生方に心より御礼申し上げます。

今回の学会発表を経て私はこの半年間で実に多くのことを学ばせていただきました。ここで、これまでのことを少し振り返らせていただきたいと思います。元々は、私が臨床実習で今年の3月のはじめに第二内科の血液グループを回っていた際に担当させていただいた症例を総括で中島先生に報告した際に学会発表の話題があがり、興味を持った私が中島先生に声をかけさせていただいたのがきっかけでした。

最初の一ヶ月は過去の日本内科学会で行われた様々な演題の抄録を読み合わせながら正しい抄録の書き方を学ぶところから始まりました。4 月に入ってから今回の症例報告に向けて参考にするのできる過去の論文の読み込みを行いました。すべて海外の論文で最初は読むのにも一苦労でしたが中島先生の丁寧なご指導のおかげで徐々に読みとくことができるようになりました。4月末頃には抄録の作成に取りかかりました。まず''この発表で聴衆に伝えたいことは何なのか''、''この発表で自分が最も面白い・アピールしたいことは何なのか''を明確にし、それをもとにして作成予定のスライドを付箋で模して最終的に発表する際のイメージを深めていきました。

抄録を書いたあとは益崎教授をはじめ他の先生からもご指摘をいただき症例についての知識を深めながらより良い抄録になるよう改善を重ねてまいりました。また、5 月には沖縄県医師会館にて第 349 回 日本内科学会九州地方会が行われ、県内開催ということもあり、実際に現地に伺って先生方の発表を見学させていただく機会を得ることができました。様々な診療科・分野の先生方の発表を聴講して大変勉強になり、また私はこれまで学会というものに参加したことがなく、初めて観させていただいたため、第 350 回で自分が発表する際のイメージを明確にすることができ、大変良い機会となりました。

抄録を無事提出したのは、すぐにスライドの作成に取りかかりました。患者さんの基本的な所見に加え、諸言、入院後経過、考察を考えて作っていくことは学会発表の経験がない私にとって少し難しい部分がありましたが一つ一つが学びの連続であり、ブラッシュアップを重ね、

自分の知識を深めながら作成していくことができました。用いる文字や図表のフォントやサイズ、色味等についても、今までは特に意識していませんでしたが、どうすれば聴衆にとって読みやすいスライドになるのかという視点に立ち、実際に何度も書き直しながら、より良いスライドを作成していくという経験を積むことができました。この経験は、今後も必ず役にたつものになると確信しており、更に自分の腕を磨いていけるようこれからも努力したいと思っています。

スライドの完成後は原稿と想定質問への回答の作成に取りかかりました。また、現地での発表の3日前には血液グループの先生方のもとで本番を想定した予演会を行わせていただき、緊張した空気の中、練習をさせていただきました。先生方が快く送り出してくださり自信をつけることができました。

迎えた8月23日は緊張はしていましたが腹を括って落ち着いて冷静に症例報告、質疑応答を行うことができました。壇上にて、自分の言葉で症例を説明し、聴衆の先生方に伝えきることができたのはとても大きな経験になりました。半年間の成果を無事に発揮することができ、現在は安堵とともに達成感を感じております。

今回の第350回 日本内科学会 九州地方会における症例報告は、私にとって「初めて自分が学会で自らが学んだことを発信する」という大きな挑戦であり、造血幹細胞移植後の難治性/抵抗性を示すサイトメガロウイルス(CMV)感染に対する新規治療薬であるMaribavir(MRV)についての知識を深めるとともに、抄録・スライドの作成から発表にいたるまで本当に貴重な経験をさせていただきました。準備から発表までの過程を通して、知識を整理する力や表現する力の不足を痛感するとともに、改善すれば必ず成長につながるという手応えも得ることができました。

学会発表に向けて、ご指導とともに快く送り出してくださった益崎教授や、この機会を与えてくださり、半年間手厚くご指導してくださった中島先生、内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座の先生方に心より感謝申し上げます。今回の経験を糧に、今後 医師として歩みを進める中でも様々な活動に積極的に取り組み、更なる成長を目指して、向上心を持って精一杯頑張つてまいります。